

心の輝き

世の中には持つてる財産の多少で人の値打ちを決める世界もあります。地位さえ高ければ、肩書きさえよければ、尊ぶ世界もあります。はなはだしいのになると衣装のよしあしがものをいう世界もあります。しかし私たちの見ている世界は、そんなものだけでは人の値打ちを定めません。職業に高下をつけないのです。

正しい道、人格の光、徳の発揮だけがものをいう世界があるのです。あなたの泣いたのが、そうしたあなたそれ自身よりも、身のまわりに外から附属したもののばかりに眼をそそいでいたためではなかったのですか。

もしそれであるならば、あなたはあまりにも愚かであったのです。私どもは一個の人間を人間として見ます。富んだ人も尊いのです。貧しい人も尊いのです。学者も尊いのです。農夫も尊いのです。靴なおしも尊いのです。大臣も尊いのです。看護婦も尊いのです。医者も尊いのです。その他一切が尊いのです。ただ尊いことにごめた人がないのです。

「あなたの看護会に何人いますか。」

「はい、五十人います。」

「どなたが会の光の中心ですか。」

「そんな者はいません。」

私はそれを聞いた時、悲しまざるを得ませぬ。看護婦であることは決して軽蔑いたしませぬ。ただ、しかし、五十人の会員の中に一人も光の把持者のいないことを悲しみます。なぜ泣いたり、淋しがったりするだけで、もつともつと努力して、道に生き、信仰に輝く人が出てくれないのでしょうか。五十人の娘の中に一人くらいはいてくれてもいい。

もしそれが事実であるならば、あなた方を、どんな幸福な場所の人にしたって何にもならぬのです。私は厳しく、かわいい妹として、その無方針な、なまけた態度を叱ります。あなたの周囲には今日まで、それを叱ってくれる人はなかったのですか。

おお心の光。私のみつめる心の輝き……………。